

概説・表記

北川 和秀

1. 万葉集とは

奈良時代後半に編纂された、わが国現存最古の和歌集。

全部で四五〇〇首あまりの和歌を収める。全二十巻。

編者は不明。ただし、大伴家持が深く関わったことは確実であろう。

作歌年代は、飛鳥時代から奈良時代中期までの一三〇年間ほど。これを四期に分ける。

歌の作者は、天皇、皇族、貴族、官人を中心に、一般庶民まで含む。

作者の出身地は近畿地方が多いが、東歌や防人歌など東国人の歌も収められている。

歌によまれた地域は大和国（今の奈良県）を初めとする近畿地方が多いが、全国に及ぶ。作者の関係で、九州北部や越中国（今の富山県及び石川県の一部）も多い。

全二十巻が一度に成ったのではなく、平城遷都からほど遠からぬ頃に飛鳥時代の部分
が編纂され、以後、増補が繰り返されて、現在見る形になったと考えられる。

歌は、基本的に雑歌・相聞・挽歌という三つの分類のもとに配列されている。この分類を部立（ぶだて）という。

相聞は恋の歌、挽歌は死にまつわる歌、雑歌はその他。ただし、初期万葉の頃の雑歌は宮廷の儀礼歌など公的な歌が多い。時代が降ると雑歌には様々な歌が増えてゆく。

当時はまだひらがなもカタカナも発明されていなかったため、万葉集はすべて漢字のみで表記されている。このため、現代では読み方の確定しない歌もある。

表記に当たっては、「春」^{はる}、「山」^{やま}、「恋」^{こひ}などのように、漢字の意味を生かした用法と、「波流」^{はる}、「也麻」^{やま}、「古非」^{こひ}などのように、漢字の発音（音または訓）だけを借りた用法とがある。

漢字の発音だけを借りた用字を万葉仮名という。

万葉集の原本は今に伝わらないが、部分的ながらも平安時代の写本（桂本など）が数点伝来している。全巻揃った写本は鎌倉時代後期のもの（西本願寺本）が最も古い。

平安時代になると、漢字のみで書かれた万葉集は読むことが難しくなっていたので、村上天皇が天暦五年（九五―）に、宮中の梨壺に和歌所を置いて、五人の人たち（梨壺の五人）に、万葉集の訓を付けさせた。これが万葉集研究のはじめといえる。

鎌倉時代中期の僧仙覚は万葉集の写本を多数集めて本文校訂を行い、注釈書も著した。

江戸時代になると、契沖・賀茂真淵などの国学者たちによって、研究が進んだ。

明治時代に『国歌大観』が編纂されたときに、万葉集の全ての歌に番号がつけられた。

その番号が今でも「万葉集の歌番号」として用いられている。

戦前に既に校本と総索引とが作られ、研究の基本的な道具となっている。

2・万葉集の名義（書名の由来）

諸説あり、確定していない。

「万」は「多くの」、「集」は「集めた書」ということであろうから、ポイントは「葉」の解釈ということになる。

諸説の中で次の二説が有力。

a「葉」を「言の葉」と解し、多くの言葉＝多くの歌とする説（仙覚など）

＊『万葉集』成立以前に、山上憶良が編纂した『類聚歌林』という書物がある。この書名においては、歌が林に例えられている。歌を林に例えることがあるのならば、歌を葉に例えてもおかしくない。

＊『古今和歌集』以降の八代集では、書名に「和歌」を含むが、『万葉集』を『万葉和歌集』とは言わない。とすれば、「葉」に「和歌」の意味が含まれているのではないか。

b「葉」を「時代」と解し、末永く伝われという願いを込めたとする説（契沖など）

＊漢籍には「葉」を「世」「代」の意に用いた例がある。

＊『古事記』序文にも「天皇詔りたまひしく、『……帝紀を撰しるび録し、旧辞を討たうねきはめ、偽いつはりを削り実を定めて、後葉のちの葉に流ながれむと欲おもふ』とのりたまひき」とある。

b説が有力だが、「多くの歌を集め、それが万代の後までも伝わるようにとの願いを込めた書」というような折衷的な考え方も可能かもしれない。

3・題詞・序文・歌・左注

歌の前に題の付いている作品は多い。これを題詞という。歌の後に注の付いているものもある。この注を左注という。

大津皇子の屍かばねを葛城かつらぎの二上山ふたかみやまに移し葬はなる時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首

↑題詞

・うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世いろせとわが見む（二・一六五）

・磯いそのうへに生おふる馬酔木あしびを手折たをらめど見すべき君がありと言はななくに（一六六）

右一首、今案かむがふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮かむみやより京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

↑左注

題詞と歌との間に漢文の序のある歌もある（ただし、序文のある作品はほぼ巻五に限定。他巻では大伴家持などの作にわずかにある程度）

子等を思ふ歌一首 序を并あはせたり

↑題詞

釈迦如来い、金口こんくに正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅らごらの如しとのたまへり。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛うつくしぶる心あり。況いはむや世間よのなかの蒼生あをひとくさの、誰かは子を愛うつくしびずあらめや。

↑序

・瓜食はめば 子とも思ほゆ 栗食はめば まして俣あはゆ 何処いづより 来りしものそ

眼交にもとな懸りて 安眠し寝さぬ（五・八〇二）

↑歌

反歌

・銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも（八〇三）

↑歌

4 ・各期の特徴

期 間	第一 期	第二 期	第三 期	第四 期
時代的背景	・ 蘇我氏の時代から、大化改新を経て中大兄の時代へ ・ 白村江の大敗、大津京遷都もあり、激動の時代	・ 壬申の乱後の安定した時代 ・ 天武天皇のもと強力な中央集権の国家が作られた	・ 律令制が確立する時代 ・ 記紀が成立し、風土記撰進の詔が出るなど、文化的な事業も活発であった	・ 天平文化の花開いた時代 ・ 律令制は早くもほころびを見せ始める
歌の特徴	・ 古代歌謡から和歌へ ・ 口承的、呪的性 格、集団性 ・ 歌体が五七の定型に落ちつく ・ 格調高い歌が多い	・ 口承から記載へ ・ 専門歌人が出現 ・ 題材が拡大 ・ 長歌が著しく発展 ・ 定型化が進む	・ 個性が開花した時代 ・ 歌人層が飛躍的に拡大し、歌のテーマも多様化 ・ 漢詩文や仏典の影響が見られる歌もある	・ 長歌は衰退し、類型的になる ・ 歌が社交の道具ともなる ・ 繊細優美、理知的 ・ 技巧的な歌が増える
代表歌人	舒明天皇 有間皇子 天智天皇 額田王	柿本人麻呂 高市黒人 持統天皇 大津皇子 大伯皇女 志貴皇子	大伴旅人 山上憶良 山部赤人 笠金村 高橋虫麻呂 大伴坂上郎女	大伴家持 笠郎女 狭野弟上娘子 中臣宅守 田辺福麻呂 遣新羅使人たち

* 磐姫皇后（巻二巻頭歌）や雄略天皇（巻一卷頭歌）などは第一期には含まない。
* 他に、東歌・防人歌

5・各巻の構成

巻一・巻二が最も古く成立した部分と考えられる。この二巻には天皇の代毎に歌をまとめるという特徴がある。また、巻一は雑歌、巻二は相聞・挽歌の部立を持つので、この二巻セットで三大部立が揃う。本来一体のものであるのを、分量の点で二巻に分割したのである。歌の時代的な範囲は、平城遷都まで。一部、増補のような形で平城遷都後の歌を含む。

巻三・巻四は、巻一・巻二の補遺と追加。

巻五は、大伴旅人・山上憶良を中心に、大宰府を中心とする九州でよまれた歌を集めた巻。天平初年の六年間ほどの期間に限られる。歌の前に漢文の序を伴うものがあるが、それはほぼ巻五のみの特徴。元号の「令和」は、巻五に収録される梅花宴の歌の漢文の序から取られた。

巻六は、巻三の雑歌の補遺と追加。ここまでの諸巻は基本的に作者名を記す。

巻七は作者不明の歌を集めた巻。

巻八・巻一〇は四季分類の巻。巻八は作者名を記す。巻一〇は作者不明の歌。

巻九は、万葉集以前に編纂されていた歌集から歌を収めた巻。

巻一一・巻一二は作者不明の相聞を集めた巻。歌によまれた地名から、近畿地方の歌を集めたと考えられる。

巻一三は長歌を収めた巻。

巻一四は東歌を収めた巻。相聞が圧倒的に多い。

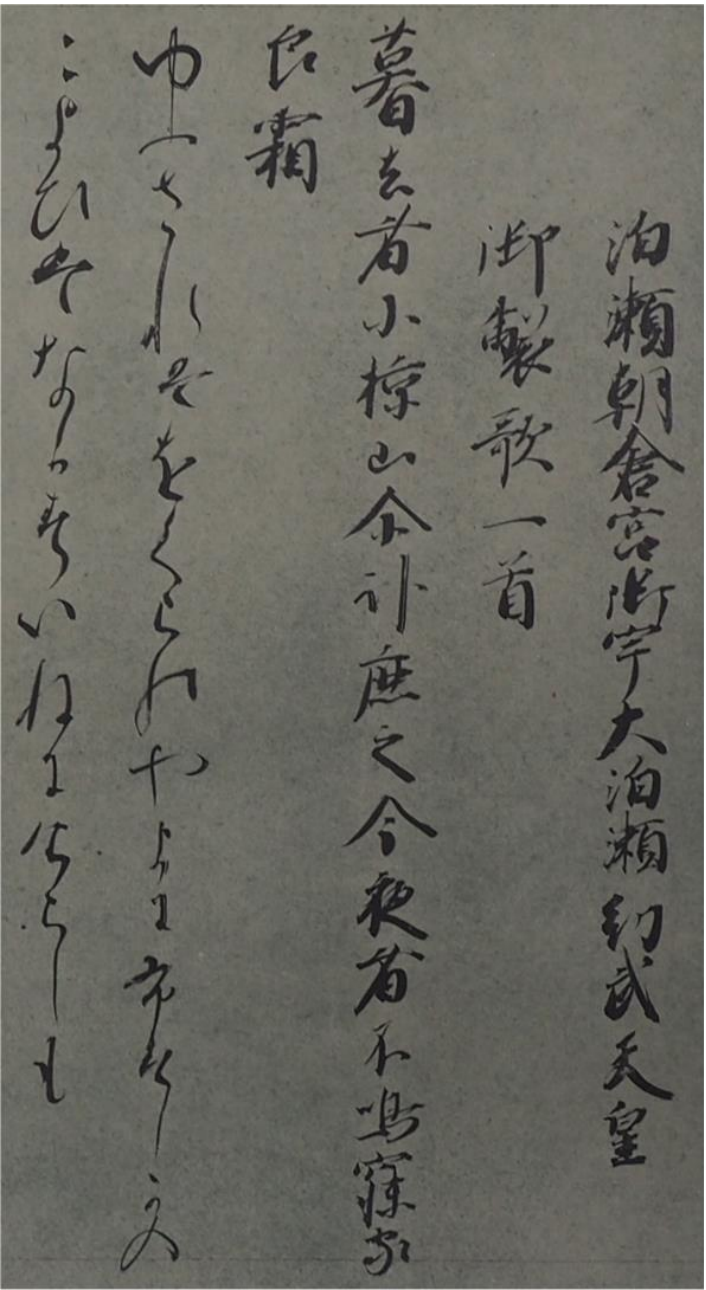
巻一五は二つだけの歌群から成る。前半は遣新羅使人の歌、後半は狭野弟上娘子と中臣宅守との贈答歌。

巻一六は雑纂的な巻。物語を伴う歌やユーモラスな歌などがある。巻一六までの諸巻の歌の時代は天平十六年以前なので、天平十六年をあまり降らない時期に巻十六までがまとめられたか。その段階では巻一六が最終巻となるので、それ以前のどの巻にも収めにくかった歌をまとめてこの巻に収録したのである。

巻一七～巻二〇は部立がなく、歌が年月日順に排列されている。大伴家持の歌が極めて多く、家持以外の作者の歌も、家持と歌をやり取りした作歌や、家持も同席した宴席でうたわれたものが多い。そういったことから、これら四巻は家持の歌日記のようなものが土台になっていると考えられる。

巻一六までがまとめられた後に巻一七以降が追加されて、現在見るような全二十巻になったのであろう。

藍紙本（巻九・一六六四番歌）



泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇

御製歌一首

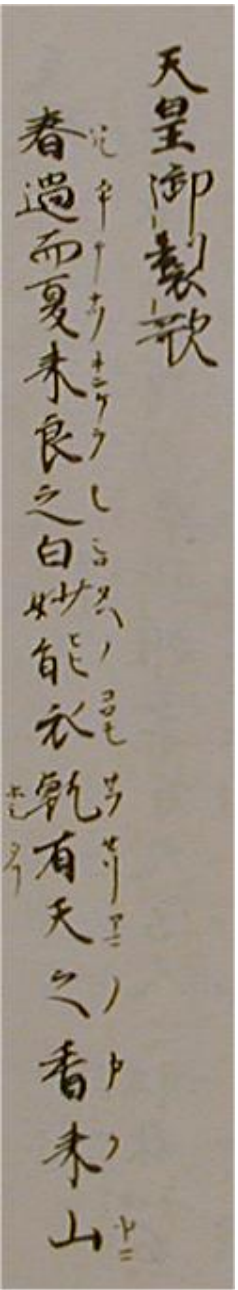
暮去者小棕山尔臥鹿之今夜者不鳴寐家

良霜

ゆふされはをくらのやまにふすしかの

こよひはなかすいねにけらしも

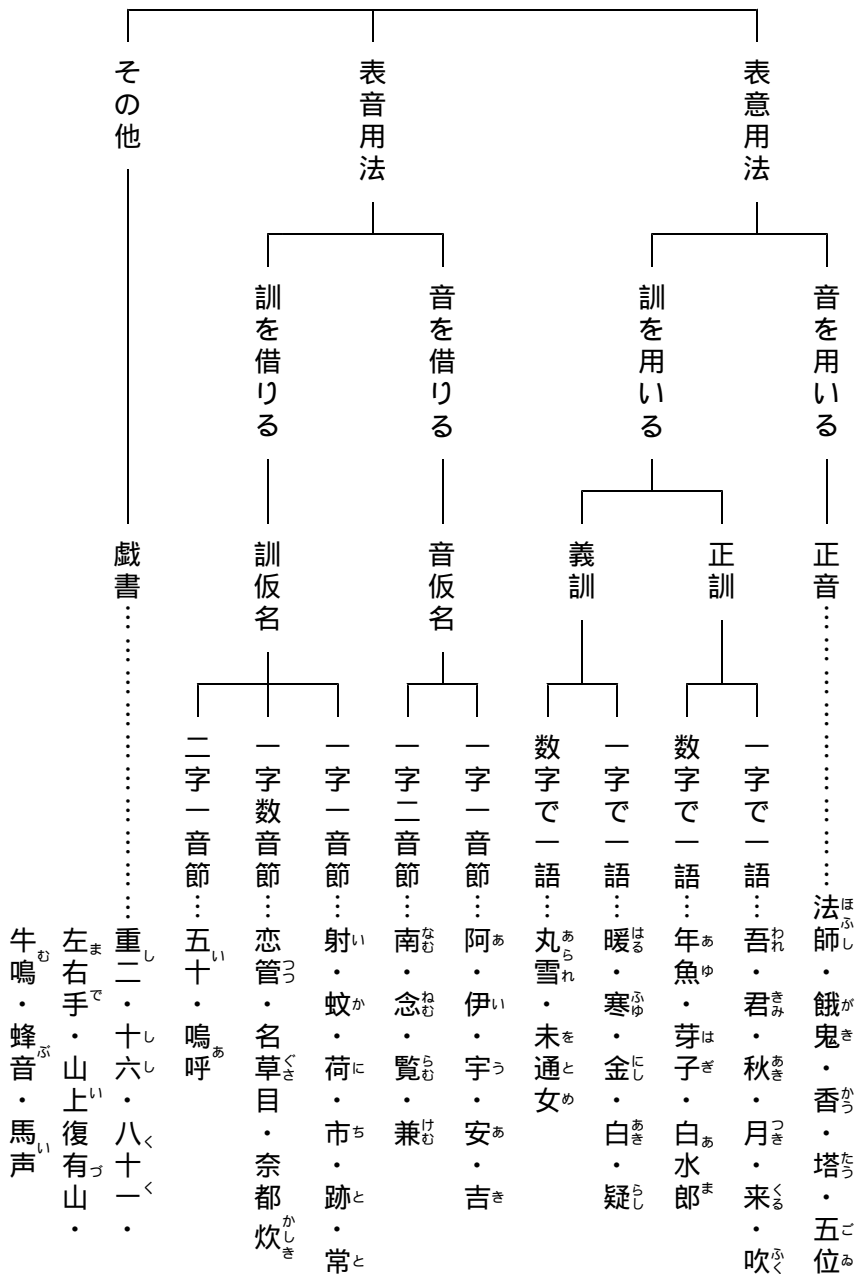
西本願寺本（巻一・二八番歌）



天皇御製歌

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

ホシタリ



《正訓字表記の歌》
春楊 葛山 発雲 立座 妹念（卷十一・二四五三）
東野炎 立所見而 反見為者 月西渡（卷一・四八）

《万葉仮名表記の歌》
余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余麻須万須 加奈之可利家理（卷五・七九三）
多麻河泊尔 左良須弓豆久利 佐良左良尔 奈仁曾許能児乃 己許太可奈之伎（卷十四・三三七三）

《正訓字表記＋万葉仮名表記の歌》
春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山（卷一・二八）
熟田津尔 船乘世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞菜（卷一・八）
春野尔 霞多奈毗伎 宇良悲 許能暮影尔 鸛奈久母（卷十九・四二九〇）

《読みの決まらない部分を含む歌の例》
渡津海乃 豊旗雲尔 伊理比紗之 今夜乃月夜 清明己曾（卷一・一五）
小竹之葉者 三山毛清尔 乱友 吾者妹思 别来礼婆（卷二・一三三）

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ（天智天皇）

秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつつ（後撰集302）

天智天皇御製

秋田刈る飯廬を作りわが居れば衣手寒く露そ置きにける（万葉集一〇・二一七四）

作者不明

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山（持統天皇）

はるすぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山（新古今集175）持統天皇御製

春過ぎて夏来たるらし白栴の衣干したり天香具山（万葉集一・二八）持統天皇

春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山（同・原文）

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながし夜をひとりかも寝む（柿本人麻呂）

葦引の山鳥の尾のしだりをのながし夜をひとりかもねむ（拾遺集778）人まろ

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

（万葉集一一・二八〇二或本歌）作者不明

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ（山部赤人）

たごのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ（新古今集675）

赤人

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（万葉集三・三二八）

山部赤人

田児之浦従 打出而見者 真白衣 不尽能高嶺尔 雪波零家留（同・原文）

奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき（猿丸大夫）

おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき（古今集215）よみ人しらず

かささぎの渡せる橋におく霜の白きをみれば夜ぞふけにける（中納言家持）

かささぎのわたせる橋におくしものしろきをみれば夜ぞふけにける（新古今集620）

中納言家持

かささぎのわたせるはしにおくしものしろきをみればよはふけにけり（家持集268）

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（安倍仲麻呂）

あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも（古今集406）

安倍仲麻呂

万葉集年表

[illegible][illegible]

卷十一	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	卷四	卷三	卷二	卷一	卷	万葉集各巻一覽
問答 寄物陳思 正述心緒 旋頭歌	冬相聞 冬雜歌 秋相聞 秋雜歌 夏相聞 夏雜歌 春相聞 春雜歌	挽歌 相聞 雜歌	冬相聞 冬雜歌 秋相聞 秋雜歌 夏相聞 夏雜歌 春相聞 春雜歌	挽歌 譬喻歌 雜歌	雜歌	雜歌	相聞	挽歌 譬喻歌 雜歌	挽歌 相聞	雜歌	部立	
	年代不明（二期～四期か）	（一期）～天平一六年頃	一期～天平一五年頃	年代不明（二期～四期か）	養老七年～天平一六年頃	神龜五年～天平五年	（仁徳）～天平一六年頃	紀皇女・天平期 聖徳太子～天平一六年 持統～天平五年頃	齊明～元正 （仁徳）天智～持統	（雄略）舒明～元明	時代	
	作者不明 （人麻呂歌集あり）	記名・歌集歌 （人麻呂歌集あり）	記名	作者不明 （人麻呂歌集あり）	記名	記名	記名	記名	記名	記名	作者名	
	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	音仮名主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体	表記	

卷二十	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十一
なし	なし	なし	なし	有由縁 并雑歌	なし	挽歌 譬喻歌 防人歌 相聞 雑歌	挽歌 譬喻歌 問答 相聞 雑歌	問答 寄物陳思 正述心緒 寄物陳思 正述心緒	正述心緒 寄物陳思 問答 悲別歌 羈旅発思
勝宝五年五月～宝字三年正月	勝宝二年三月～五年二月	天平二〇年三月～勝宝二年二月	天平一八年正月～二〇年春	二期～天平一六年頃	天平一一年頃	年代不明（二期・三期か）	年代不明（二期・三期か）	年代不明（二期～四期か）	年代不明（二期～四期か）
記名	記名	記名	記名	記名	中臣宅守・弟上娘子	作者不明 （国名不明）	作者不明 （人麻呂歌集あり）	作者不明 （人麻呂歌集あり）	作者不明 （人麻呂歌集あり）
音仮名主体	正訓字主体	音仮名主体	音仮名主体	正訓字主体	音仮名主体	音仮名主体	正訓字主体	正訓字主体	正訓字主体